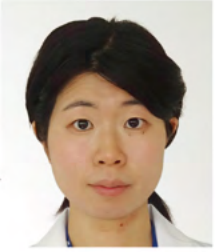
優秀演題賞の紹介（1） 最優秀口演賞

# 第2がんを診断された患者の予後と死因～単発がん患者との比較



工藤 榛香
大阪国際がんセンター　がん対策センター

この度の日本がん登録協議会第30回学術集会で、私が発表しました「第2がんを診断された患者の予後と死因～単発がん患者との比較」が、最優秀口演賞に選ばれました。本研究は、大阪府がん登録と人口動態統計の死亡情報をリンケージさせた資料を用いて、がんサバイバーの新たながん、すなわち第2がんを診断されてからの予後を調べたものです。胃がん患者では、最初のがん診断から3か月未満に診断された場合（同時性）の5年予後は、単発がん患者より悪いという結果でした。しかしながら、胃がん患者の中でも最初のがん診断から3か月以上経った場合（異時性）の5年予後は、単発がん患者と同じくらいでした。肺がん患者では、同時性、異時性共に単発がん患者と同等以上の5年予後でした。人口規模が大きく、長い歴史を持つ大阪府がん登録だからこそ、このようなテーマに取り組むことができました。↗

↘共同演者の先生方に加え、学術集会当日は座長の大木いずみ先生や中林愛恵先生をはじめとする先生方よりご助言をいただくことができました。この場をお借りして感謝申し上げます。これからもがん登録業務や研究に真摯に取り組み、がんサバイバー支援に繋げられるよう精進してまいります。

いただいた賞状

優秀演題賞の紹介（2） 最優秀ポスター賞

# 大阪府がん登録データを用いた子宮体がんの動向および臨床的観点からの解析

八木 麻未
大阪大学大学院医学系研究科産科学婦人科学

本邦において、子宮体がん症例数が増加していることは知られていたが、詳細な解析はされていなかった。我々は、1977～2016年に大阪府地域がん登録に登録された子宮体部腫瘍について、その疫学的動向および臨床病理学的特徴につき解析を行った。

子宮体部腫瘍全体の年齢調整罹患率は1980～2000年は緩やかに増加していたが、2000～2011年において更なる増加に転じ、2011年以降も増加が持続していた（図1）。年齢調整↗

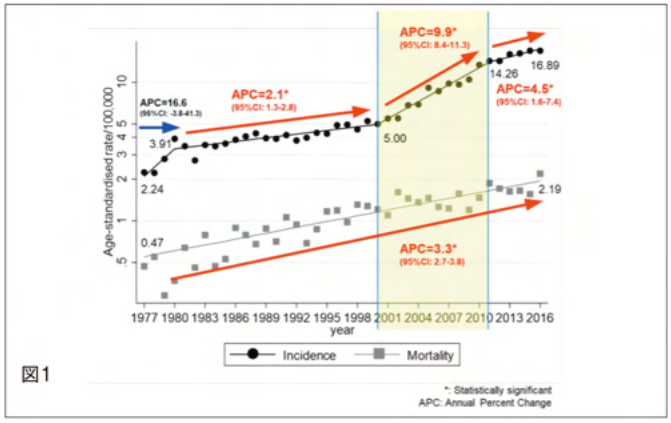



図1

↘死亡率は、1977～2016年で一貫して増加していた（図1）。2000～2011年および2011～2016年の年齢調整死亡率のAPCは、同期間の年齢調整罹患率のAPCを有意に下回っており、治療効果の向上が示唆された。

子宮体がんの10年相対生存率は、「Localized」・「Adjacent organ・Regional lymph node」では2001年以降に有意に改善していた。これら症例において、2001年以降、手術に組み合わせる補助療法として放射線療法でなく化学療法を実施した割合が有意に増加しており（$p<0.001$）、補助療法の変化が予後の改善に寄与したことが示唆された。

また、類内膜がん・漿液性がん・明細胞がん・がん肉腫の各組織型で、好発年齢・罹患率の変遷・予後等が大きく異なることも明らかとなった。

30年の節目であった学会で、このような賞を頂戴し、誠に光栄に存じます。

この場をお借りして、ご指導を頂きました諸先生方、大学会長の田渕健先生に心より感謝申し上げます。

今後も情報発信が出来るよう解析に努めて参ります。